高桑先生の喜壽を祝う

三　好　保　德

愛媛縣立三瓶高等學校

理學博士高桑良興先生はこゝに目出たく77歳をむかえられました。そして今すこぶる御元氣でいらつしやることは直接多足類研究の指導を賜つた私らとしまして，心からのお慶びを申上げないではいられません。私の日記を出して過去に出した手紙の寫しを見てみますと，昭和18年3月23日高島さんに差上げた手紙の中へ始めて，高桑先生のもとで多足類研究の御指導を受けるようになれないものでしようかという私の思いを打明け且おたのみをしています。その後幾回もこのことについて高島春雄氏は御親切なお手紙を下さつたのですが，その年5月7日に頂いたお手紙の中に，その頃風引でやすんでいられた高桑先生から高島さんあてのおハガキが同封してありました。そこには三好君が上京して多足類を研究するということを大いに歡迎する，ということと私の上京後の生活についての御配慮がかゝれていました。この頃松山市でさえも警戒警報が發令されたりしていました。

當時松山市に高桑先生の御親戚，藤井さんがいらつしやることを知つていました。6月9日その頃いた松山高女の私へ電話がかゝつて來ました。出てみますとおどろいたことに高桑先生からでした。藤井に來ていると申されました。私はすぐ出淵町の藤井さんのお宅へ参りましてこの時はじめて高桑先生にお目にかゝりました。いろいろお話をうかがいましたが，その時私は「現在先生のもとで多足類の研究をしている方がございますか」とおきゝしました。先生は「ない」と申されました。いよいよ上京して御指導を受ける決心をしたのですが，6月13日先生と大洲方面へ採集に行きました。この時先生と二人である農

家の庭さきに積重ねてある古瓦をがらがらとひつかいてムカデの採集をして，とび上る程ひどくしかられたことは今思い出しても失笑を禁じ得ません。先生は落着きはらつて「後で積重ねておいてもいけないですか？」と申されました。ところが「いかん」といつてその農夫は足をふみならしました。私はかゞんだまゝ地面を見て笑つたりしないようにじつとしていました。先生は「あゝそうですか」といつてくずれた瓦を直しにかゝられました。私もこれはたまらんと思つてびくびくもので瓦をもとのようにし，ほうほうの態でそこをのがれました。その後高桑先生と高島さんのお世話で昭和19年4月希望通り上京することが實現し，尚高島さんの限りない御親切で文理大の囑託となりいよいよ多足類研究にしたがうことになりました。毎日毎日東京文理大動物學教室の先生のよこの机で研究をしました。今思い出しても心のおどる日々でした。

1月8日フサヤスデを見に行つた日，三瓶町での記念撮影。先生當時75歳。

先生はいつもいらつして全く研究に沒頭なされ，不明の点をおたずねするのも機會を待たねばなりませんでした。私はこのような生活を3年程つずけたい希望をもつていましたが不幸戰爭の雲行きが日に日に惡くなり，とうとうその年の暮近く東京に居られなくなつてしまいました。疎開です。けれども幸いなことに高桑先生は松山へ疎開されることとなり，私も松山へ歸りました。先生の多くの文献と標品とを全部もつて。そして私は再び松山高女につとめることになり文理大の研究室は松山高女の生物室に移つたかたちです。先生もお出になつて研究なさいますし，私はつずいて御指導を賜る幸福をもちました。それだのに今度は松山さえ危險になり遂に文献の疎開をすることになりました。そうして昭和20年の7月26日の夜，松山はものすごい空襲を受けて焦土と化しました。學校も全燒です。幸にも先生の文献と標品の大部分とは殘りました。その頃先生は山口縣防府にいられましたのでなかなかお目にかゝることが出來ないことになりました。昭和21年12月15日先生は八幡濱高女へ轉任していた私のところへ來て下さいました。先生は私が八幡濱市に近い三瓶町で採つたハイボクフサヤスデの產地をこの眼で見たいと申されました。その頃から頭痛がすると言つて居られましたが20日三瓶町にある私の家へうつられてから，とうとう疑似パラチフスで病床につかれました。隨分高熱の日がつずきまして衰弱されました。そしてうつらうつらと睡られました。そのねむりからさめられると直ちに多足類に關する話しです。いろいろ文献の中の私は既にもう知つていなければならないような点を質問されるのですが，どうも明答が出來ないのでひや汗を流しました。ある時苦しそうにうめかれるので呼び起しますと「どうも變んだ，僕のしりへムカデの Endbeine がはえているようでいけない」と申されるのです。さめてもねてもムカデのことです。私は全く感にたえました。その時のことは2冊のノートに滿ちていますがこゝにその總てを書くことは出來ません。

しかし幸に先生の御病氣は22年の1月に入つてから急速によくなられました。

醫者は先生の强靱な心臓に舌をまいていました。私が御病氣のことをこゝへ書きましたのは全く次のことを申上げたいからなのです。1月6日やつと風呂にいられました。お足は不安定でおつれせねばなりませんでした。1月8日朝，フサヤスデの產地へ行くと申されましてはじめて外に出られました。全くやつとお步きになる程なのですが私は先生を御案內して三瓶町の東の山に食い入る淺い谷間に向つて步きました。客という部落から坂道になりました。さすがの先生も1m登つては休み御苦心の御樣子が見え，私ははらはらする思いでした。先生のお顏はやがて到着するやフサヤスデの產地を見る熱情にもえています。私は先生の杖をもつてひき上げてあげましたが5回も足のふみ場を定め4步いつては休まれるのです。病後，しかも75歲のお方が，あの5mmに足らない小動物を，それも旣に何回か私が生きている標品をお見せしていますのに，どうしてもその產地を見なければならないとの苦行です。私は身ぶるいしました。あゝそのさかんなる鬪志，これこそ眞の科學者の姿でなくてなんでありましようか。私はまこと崇高なるものへの感激を先生によつて與えられました。1月にもかゝわらずフサヤスデはその坂の上の落葉の下で採ることが出來ました。先生が滿足なさつたお顏を思いおこすことが出來ます。思い出は盡きませんが，先生が益々御元氣で私どもお後をしたい行く者どもをいつまでも御指導下さいますことをお願いしてペンをおきます。(1949. 4. 25)